

〈韓国文学史〉の記述と〈親日文学（二重言語文学）〉の位置

鄭炳浩

一、はじめに

韓国では二〇一〇年日本の韓国強制併合一〇〇年目を迎え、学界では様々な形の学術大会が開催された。この流れの中で筆者が属している高麗大学校日本研究センターの〈植民地日本語文学・文化研究会〉は二〇一〇年一〇月に〈日本帝国の移動と東アジア植民地文学〉というテーマで国際学術シンポジウム（一）を開いたことがある。

たとえ韓国併合一〇〇年を論じないとしても、二〇〇〇年から現在に至るまで韓国の国文学界はまさに〈親日文学〉研究の全盛期と言っても過言ではない。この現象は、「林鍾国の『親日文学論』（一九六六）以降、間欠的になされてきた一九四〇年代前半期の文学に関する研究が最近また浮上している」と言及し、「さらには文学に携わっている人であるなら、これに対して一定の見解を表現することが強要される」（二）状況さえ展開されていると言い及す尹大石の指摘とおしても確かめられる。この指摘は二〇〇六年という時点における言及であるが、それ以降も「親日文学」に関して活発な研究がなされており、当時の植民地文学をめぐる数多くの研究成果が

発表されている。〈親日文学〉は長い間韓国の近現代文学研究から排除されてきたのだが、今世紀に入って韓国の親日文学（二重言語文学）に関する研究史（三）がまとめられるほど最近その議論の幅が拡大されていることも事実である。

〈親日文学（二重言語文学）〉研究がこれほど活発に行われているにもかかわらず、この分野が一国文学の範疇を定める〈韓国文学史〉に即座に反映されているかと言えば、必ずしもそうではないのが現状である。近代国民国家の形成期に東アジアでは初めて〈文学史〉編纂のブームが巻き起った日本の例を見ると、「国民が、其思想感情想像等を、其国語で記載したものを、国文学と言ひ、国文学の、起源と、発達と、変遷とを叙述したものを、国文学史」（四）とする觀念のもとで文学史の編纂がなされていた。それで「文学史」には「国民の気風思想感情と云ふものが現はれて」おり「国民の心性生活」を知るものであるため、「一国の文明」（五）がよく呈されているという論理が形成されて以来、このような觀念が文学史記述の方向を決定したといえる。すなわち、〈日本文学史〉が「国民国家の文化的アイデンティティ」（六）を形成するための手段という役割を果たしており、この意味で文学史を国民、国語、国家、国民文化が一体化

されたもの(七)として前提する国文学の伝統が胚胎したのである。このような国文学史の伝統によって帝国主義時代にアジア各地に残された数多くの「植民地日本語文学」がこれまで(日本文学史)の領域から排除されてきたのである。

だとすれば、一九四五年から最近にいたるまで刊行されたいわゆる(韓国文学史)の主な論点は何であり、当時多くの韓国人作家が無関係ではなかった(親日(二重言語)文学)に対してはいかなる態度を取っていたのであろうか。本稿では(韓国文学史)の主な論理は何であり、最近に入って研究のブームが起っている(親日(二重言語)文学)が(韓国文学史)ではいかなる位置を占めているのか、また時間の流れとともにいかなる評価を受けているのかを国文学史の論理の中で見てみる。そして、二〇〇〇年代におけるこの分野の研究ブームを文学史の記述という問題と結び付けて考察することで、(文学史)記述の外的拡大はもちろん、東アジア植民地文学史をめぐるこの地域の共通の認識を導くところに本稿の目的がある。

二、韓国における(国文学史)記述の展開と(親日文学)の位置

東アジア地域の文学史編纂を見ると、日本の場合一八九〇年代に文学史の季節が到来し(八)、国民国家の形成とともに数多くの文学史が刊行されており、中国の場合も林伝甲の『中国文学史』を初めとし(九)活発な文学史の編纂がなされている。しかし韓国の場合一九四五年に韓国が日本の植民地から独立するまで一國文学史は安廓の『朝鮮文学史』と権相老の『朝鮮文学史』(中央仏教専門学校、一九三〇年代、年代未詳)しかない(一〇)。安廓が文学史を書く以

前にも韓国で最初の近代的文学論と言われている李光洙の「文学とは何か」(一九一六)をみると、そこにも「文学史論」とも言えるような議論が認められる。

韓国の文学史(論)研究では、李光洙と安廓の論理をそれぞれ「伝統断絶(否定)論」と「伝統革新(調和)論」(一一)と指摘しているように、彼らは朝鮮の伝統文学に対する評価を異にしている。李光洙は「少なくとも李氏朝鮮五百年間には吾人は「私たちのもの」と言えるほどの哲学、宗教、文学、芸術を持つていなか」(一二)ったという朝鮮の伝統文学不在論を彼の文学史論の前提としている。

一方、安廓はこのような伝統文学不在論の根拠となる漢文、中国思想に対して「外国文字を輸入して朝鮮性で同化して使用し、(中略)その著作にして千古に渡って不朽にせしめるのは世界文学史において大特色である」(二三)と言つて、漢字を朝鮮の特性に合わせて「同化」させることで世界文学史の中でも他にその例のない民族文学を創り出したと主張している。このように伝統文学をめぐる価値判断は異なるが、彼らが文学史をとおして民族文化のアイデンティティを確立し「民族精神」「民族思想」を鼓吹しようとしたのはその文学史論の基本的な方向であった。しかし、彼らが志向する論理は究極的には民族文化の宣揚とナショナル・アイデンティティの模索にあったといえようが、その認識は日本で造られた(日本文学史)、または否定的な朝鮮(人)言説と錯綜する形で胚胎されたことも厳然たる事実である(一四)。

しかし、一九四五年に日本より解放されてからは(韓国文学史)が相次いで刊行され今日まで数多くの国文学史が書かれてきた。この(韓国文学史)は刊行時期によってその目的と指向性を異にし韓

国文学の全体像をめぐった多様な概念と新しいパラダイムを築いてきた。だとすれば、解放以降現在に至るまで〈韓国文学史〉の記述に際して、その主要な論点は何であるかを考察するためにまず次の引用文を見てみる。

① 文学の史的変遷過程を研究すればするほど、必ずその時代の国民の氣風、風尚、趣味、思想、感情などを知るだけでなく、その上現在我々を支配している民族精神がいかに形成されいかなる変遷を踏んできたかという、その足跡をたどることができるのだ。(一五)

② 国文学は、朝鮮人の思想と感情、即ち心性生活を言語と文字によって表現した芸術である。(中略) 朝鮮文学といえれば第一朝鮮の言葉で朝鮮の思想・感情を表現した文学を指すと(後略)(二六)

引用文①と②は上記の日本文学史の例から見たことと同じく、「国文学」や「国文学史」の記述をとおして「民族精神」と民族の「思想と感情」が究明できることを明らかにしている文章である。ナショナル・アイデンティティの構築と密接に関わっているこのような考え方は「朝鮮文学といえは無論朝鮮人が朝鮮文で作った文学」であり「朝鮮人自身の精神を記録した」ものであるという「文学とは何か」における李光洙の主張から窺えるように、一九世紀末から二〇世紀初めの〈日本文学史〉あるいはその影響を受けていた朝鮮国文学を論じる際の基本的な認識であったと言える。とりわけ、こ

の短い文章に示されている「国文学史」に対する定義付けは、属土主義の土台となる「国語」思想とともに「国文学」が国家、国民、国民文化の総合であるという認識をよく呈している。

この論調は解放後新しい民族国家に対する念願を謳歌した一九四〇年代末の論理であるだけではなく、たとえ観点上の差異はあるとしても比較的に近來に書かれた金在湧の『韓国近代民族文学史』(一九九三)や權寧珉の『韓国現代文学史一』(二〇〇二)(一七)においても同じ論理が繰り返されていることが確かめられる。一方、引用文②に見える「朝鮮文学」を「朝鮮の言葉で朝鮮の思想・感情を表現した文学」という考えは文学の属土主義を強調した論理である。この見方はたとえ韓国文学の中における植民地時代韓国人作家の〈日本語文学〉を論外に置くとしても朝鮮時代までハングル文学よりもっと広範囲に渡って創作されていた「漢文学」と関わるため韓国文学の範疇を論じる際に多くの論争を引起した。

③ 新文学が西欧的な文学ジャンルを採用してから形成されており、文学史のあらゆる時代が外国文学の刺激と影響と模倣で一貫したと言っても過言ではないほど新文学史とは移植文化の歴史である。(二八)

④ 文学は政治や社会学とは異なって「芸術」という特性を持っているため芸術の歴史は単純に社会主義や民族主義という一般歴史の価値基準だけでは成り立つことができないからである。即ち、文学史の記述で記述対象となる作品の選定にはいつも美的価値の範疇から離脱することができないと

いう事実が認識されるべきである。(一九)

次に、引用文③は韓国近代文学の起源をめぐった議論であるがここでは韓国近代文学を西欧や日本文物の「移植文化」として捉えている。白鐵の文学史や趙演鉉の文学史(二〇)も大体この意見に同感を示しているが、このような観点に根本的な異議を唱えるようになったのは一九七〇年代に入ってからである。一九七三年に刊行された金允植・金炫『韓国文学史』では「韓国文化の周辺性」を克服するためには「ヨーロッパの文化を完成されたモデルであると考えたいけない」(二五頁)と見なし、「移植文化論と伝統断絶論」(二一)を断切するためには「韓国文学はそれなりの神聖なものを捜し出すべきである」(二八頁)と主張している。このような観点から韓国近代文学の起源をめぐっては次のように主張している。

文学に限って言えば、近代文学の起点はそれ自体の内にある矛盾を言語で表現しようとする言語意識の台頭から見定めなければならない。(中略)そのような意味で、我々は李朝社会の構造的矛盾を文字で表現しそれを克服しようとする体系的な努力が芽生えた英正祖時代を近代文学の始まりとして捕らえようとする。(二〇頁)

ここで近代文学の起源を朝鮮後期の英正朝時代へと遡及させるといふ論理にはまず時調や歌辞など従来の文学ジャンルの集大成、パソソリや仮面劇の小説ジャンルへの発展という文学内部の状況とともに身分制度の混乱、商人階級の台頭、実事求是派の成立、独自の

手工業者の台頭、市場経済の形成という文学外的環境も考慮されている。この主張は当時の韓国歴史学界の動きと「文学社会学的」(二二)論理が結び付いた結果であると言えようが、近代「西欧の模倣」といふ論理を文学史の中から乗り越えようとした試みは特記に値する。一方、林和以来、白鐵、趙演鉉の文学史に対して痛烈な反撃を加えたいわゆる「内在的發展論」は一九八〇年代の趙東一の『韓国文学通史』(一九八二―八六)にも継承されている。

次に引用文④の場合は、文学が芸術である以上「文学史」の「記述対象」として「美的価値」がその基準となるべきことを明らかにした文章である。この論理は「純粹文学論」における文学の当然なる論理的帰結のように見えるが、長い間分断国家としての冷戦論理が強かった韓国文学界では文学のイデオロギーをめぐって様々な立場の差異を引き起こした。例えば、このような前提に立って「国民文学派の台頭と折衷主義の登場」を「民族主義的な根底と純文学的な根柢」(四五〇頁)から胚胎したと説明しながら「プロ文学の反民族的で反文学的な破壊行為に対抗して現われた韓国特有の文壇風景の一つ」(二三)と見る純粹文学擁護論がそれに当たる。この論理は「反民族的で反文学的な破壊行為」という言葉によく呈されているようにプロ文学や現実参与文学全般に辛辣な批判を加えており一九五〇年代の政治的状況を端的に示している。この趙演鉉の文学史に対して「当時冷戦体制と反共イデオロギーの影響」(五一頁)によって韓国近現代文学の実像を存分に反映していないと批判しながら、「ブルジョア階級の理念は民族的課題を十分に随行しな」かったという理由で「一九四五年解放以前まで我が民族文学は進歩的民主主義文学の志向を明らかに」(二四)していたという金在湧の文学史が

このような対立的構造をよく見せている。

以上のように、〈韓国文学史〉は文学や国文学の記述をめぐって様々な論争が時代によってその枠組み(二五)を異にしながら展開されてきたが、いわゆる〈親日文学〉に対するスタンスは大同小異であると言える。すなわち、一九四〇年代の末に刊行された金思燦の『国文学史』や白鐵の『朝鮮新文学思潮史』(一九四九)で一九四一年の末から一九四五年まで約五年間は韓国の新文学史において羞恥に満ちた暗黒期であり、文学史的には白紙に当たるとするブランクの時代(二六)と定めた論調はそれ以降〈韓国文学史〉記述の大きな方向性を提示している。特に張徳順の『韓国文学史』(同和文化社、一九八二)と洪文杓の『韓国現代文学史一』(創造文学社、二〇〇三)を除いては「親日文学」は文学史記述の対象ともならず、記述されていてもその具体的様相が無視されたまま極めて短い紙面しか与えられていない。

その理由は「移植文化論」にしる「内在的發展論」にしる〈韓国文学史〉が共通的に担っていたナショナル・アイデンティティの創出と探索、国語という属文主義によるところが少なくないと言える。

三、〈韓国文学史〉の編纂と一九四〇年代〈親日文学〉表象

これまで考察してみたように、金思燦が述べた〈親日文学〉に関する定義付けは以降の〈韓国文学史〉でも持続的に再生産されている。即ち、それは日本植民地から解放されて間もない時点における単純な自己否定だけではない。なぜかと言えば、「一九四一年以降韓国文学は韓国語が奪われ、その発表の機関さえ奪われ仮死状態に突

入した。完全なる文学史的空白期と暗黒期が到来」(二七)したという、今世紀に入って書かれた『韓国現代文学史』でもよく散見される言説であるからだ。

ところで、「親日文学」に対するこのような表象には大きく見れば二つの観点が内在されている。一つは日中戦争と太平洋戦争以降「日本」の軍国主義が最後の悪事を働き、あらゆる面に渡って「反逆戦」の急迫した速度に合わせるよう拍車が掛けられて行つて(二八)おり、このような時局を背景として弾圧による収奪と被害者のイメージを強調する論理がこれに当たる。もう一つは上記の「文学史的には白紙に当たるとするブランクの時代」という言葉がよく示唆しているように、この時期は「韓国文学を云々する時期ではな」(五三八頁)いと見る韓国民族文学不在の時期という含意がここに当たる。

文学が自己の民族語さえ奪われる際に、これ以上続けられないのは説明を待たない。そのような情勢の中で一九四一年四月に「文章」は廃刊され、「人文評論」は「国民文学」へと改題され辛うじて続刊されるようになった。その後、数年間に渡り文学が我が新文学史上において恥辱のページであることは誰も知っている事実である。(二九)

この引用文は「政治的で実際のな面においてだけではない。文化の面でも直接彼らの侵略戦争に協力する文化政策が施行」(李秉岐・白鐵、四四九頁)されて韓国文学の「暗黒期」が始まっており、そのような意味で民族文学そのものが収奪されたという見解を述べているところである。特に植民地当局の弾圧による民族文

学の収奪論は、「我が文学人たちは彼らが主催する時局講演に参加し地方を巡講し所謂大東亜文学者大会に参席して直接彼らの戦争政策への協力が強要され」(三〇)て、いわゆる〈親日文学〉が誕生するようになったという論理的な帰結を提示している。だからこの〈親日文学〉という暗黒期は内鮮一体政策、韓国語の使用禁止、創氏改名、皇国臣民化などの民族抹殺政策と強制徴兵、神社参拝、韓国語新聞・雑誌の廃刊、朝鮮文人協会の設立などあらゆる分野に渡る植民地的弾圧と収奪の延長線上、あるいはその結果物であったわけである。

一方、このような論理をもっとも赤裸々に見せている例が趙潤濟の『韓国文学史』である。趙潤濟は「戦争政策に強制的に協力を求められたため、我が文学人たちは手足を縛られ引き回される奴隷のようになった」という認識のもとで、「自己の名があっても自己の名を呼べず、自己の言葉があっても自己の言葉を使えないだけではなく詠むこともできなかったので、人類歴史上にこのようなことが他にあったのか。文人たちはひたすら天を仰向いで恨歎し国が失ったことに泣くだけであった」(三二)と、当時の文学的状况が韓国人作家の意志とは関係のない、日帝の弾圧と収奪による結果であることを主張している。しかしこのような論理は〈親日文学〉≠民族文学の暗黒期を強調しているかのように見えるが、〈親日文学〉を日帝の強要と収奪による結果であると見做すことで、結局は当時の「親日文学」に内在していた韓国人作家たちの自発的な協力と国策扇動の文学的表現が隠蔽されてしまう矛盾点を持っている。特に「親日文学」を単に日帝の強要と収奪だけで理解しているために「親日文学」は韓国文学の「文学史的空白期」に当り、したがって〈親日文学〉は自

然に民族文学を記述する空間である〈韓国文学史〉から排除・消去されてしまう。ところが文学の具体的内容を消去することで〈韓国文学史〉記述の根幹とも言えるナショナル・アイデンティティの確立と相反する結果を生んでしまった。文学史の著者たちが意図したかどうかは扱措くにしても、この結果は文学者の国策協力に免罪符が与えられる可能性があるとも言える。

しかしあらゆる文学史が〈親日文学〉を言及する際、収奪論と民族文学の空白期のみを強調しているわけではない。例えば、「暗黒期文学」と一つの節を充てている張徳順の『韓国文学史』(一九八二)では〈親日文学〉を代表する「国民文学」の当時のブームについては「文人たちの中には強要により仕方なく筆をとった人もい」たが、「これとは反対に真情で国民文学に心酔して日本精神化しようとする文人たちがいたのも事実である」(三二)という記述がこの事実をよく示している。即ち〈親日文学〉の量産は単なる弾圧による強制や収奪の結果としてだけではなく、当時の文学者の中には自発的な参与と協力があつたことを告白している。このような論理は權寧珉の『韓国現代文学史一』(二〇〇二)でも「一九三〇年代の末期以降韓国文学は、内鮮一体論の支配的言説に対応することができる抵抗の論理を確立するところまでには至らずに失敗している」(四四二頁)ことを主張している。この失敗で「親日的な文筆行為がすべて皇道文学の実現」(三三)の方に向けてしまったという主張を通して一九四〇年代の文学的状况が単に弾圧と収奪の結果だけではないことを明らかにしている。しかし韓国文学界で日本帝国に対する抵抗と対応を中心としてこの時期を捉えようとした〈韓国文学史〉における韓国人作家たちの自発的な協力に関する記述は比較的に一九八

○年代以降に見える現象と言える。

一方、「親日文学」が誕生する過程が日帝の過酷なる弾圧によるものにして自発的な参与や抵抗論理の不在によるものにして、〈韓国文学史〉では植民地時代の韓国文学が日帝の政治的圧迫に積極的に対応しながら民族文学を綿々と発展させていった期間として捉えようとする姿勢が著しく現われている。このような論理は、「日帝植民地治下を文学史の中から除去してしまおう」という極端的な主張には一理がなくもないが、民族意識の目覚めという面でこの時代ほど知識人の強力な応戦力を呼び起こした時代は見当たらない」（三四）という金允植の評価によく呈されている。また金在湧の「危機の時期にも（中略）民族文学を守ろうとする努力は続き、暗黒期を明かす一筋の光となった」（三五）という文章でも確かめられる。このような姿勢は「親日文学」がたとえ民族文学史において「暗黒期」であり「羞恥」に満ちた歴史ではあるが、植民地時代の中から日帝に対する抵抗と対応論理を見付けて行かなければならない一国文学史の論理的帰結でもある。

以上見てきたように、〈韓国文学史〉における「親日文学」に対する認識を一言で要約すると、「羞恥に満ちた暗黒期であり、文学史的には白紙に当たるブランクの時代」である。だが、それぞれの文学史で提起している論理は植民地時代に対する歴史的認識、即ち弾圧と収奪、抵抗と協力という二項対立的な観点に基づく歴史的巨大言説の中に位置していたと言える。

四、〈親日文学〉研究から二重言語文学研究へ、そして〈韓国文学史

〈韓国文学史〉で〈親日文学〉の位置付けに初めてその方向を決めた日帝の弾圧とそれによる民族文学の収奪論は、幾つかの問題点を孕んでいる。第一、当時国策文学「〈親日文学〉」が形成される過程で韓国作家の積極的な協力があつたという事実が隠蔽される可能性、第二、当時民族文学の空白期として見做すことで〈親日文学〉の具体的な歩みとその内容が消去されてしまう可能性、第三、当時日本語文学に対する具体的な功罪や評価が遮られる可能性がこれに当る。実際この究明のためには二〇〇〇年代の韓国文学界の新しい流れを待たなければならなかった。

〈親日文学〉は主に一九九〇年代まで日本植民地時代末の植民地文学を評価する価値概念をよく示している用語である。即ち、〈親日文学〉は前の〈韓国文学史〉にも見えるように一九三九年から四一年に至るまで「起点の設定には意見がなくはないが暗黒期と名付けることには大体一致」（三六）しているほど羞恥に満ちた歴史として評価されている。たとえ文学史ではないが、「親日文学」研究の先駆的著作である林鍾国の『親日文学論』では「親日文学」を「主体的条件を没却した盲目的な事大主義的日本の礼讃と追従をその内容とする文学」であり、「売国的文学」（三七）であると規定している。同じく〈親日文学〉研究の代表的な著作の一つである『日帝末暗黒期文学研究』で、宋敏鎬は一九四〇年代前半を「回想することさえ嫌な恥辱的傷痕の時期」であり「親日阿附の御用作家たちが毒草のように芽生えた」時期であると説明しながら、その類型を「狂的な戦争賛美、鍍金された御用、親日文学」（三八）として分類している。〈韓国文学史〉では〈親日文学〉を「暗黒期」と見做し文学史の「空白期」と捉えて具体的な記述を避けていることとは異なり、この研

究では積極的に当時〈親日文学〉の展開様相、そして親日文学の類型と個別作家論を展開しているところにその意義がある。しかしこの時期の文学作品をひたすら帝国日本や植民政策に対して抵抗か追従かという二項対立的な論理だけで判断したので、この時期の大多数の文学が結局は〈親日文学〉であるという認識が形成された。

主に民族文化の収奪論を唱えていた研究者を中心として、ナショナル・アイデンティティ構築という面から〈韓国文学史〉は長い間〈親日文学〉の具体的な記述を避けていたが、いわゆる二〇〇〇年代の〈親日文学〉研究を先取りするような可能性をも持っていた。例えば、このように親日的な傾向を一方的に罵倒し断罪するところに止まらず、正しく理解し評価するためにはとても繊細な視覚が必要」(三九)だとする立場を提示した金在湧の発言、文学史では初めて自発的な親日文学があったことを記述しその主要な言説と展開過程を紹介した張徳順の『韓国文学史』『韓国現代文学史』で洪文杓が「暗黒期文学史記述の意味」(四〇)を提示しながら暗黒期文学史を詳細に記述しているところがそれに当る。

韓国の国文学界では二〇〇〇年代に入って「親日文学」研究ブームとも言えるほど、「親日文学」や韓国人作家の日本語作品に対して国民国家や民族という準拠を相対化しながら多様な形で「親日文学」の再検討が活発になされてきた。このような動きをもっともよく示しているのがこの時期を「親日文学」という観点からではなく「二重言語文学」という観点から捉えようとする論点の再設定である(四一)。

一方、この時期の文学を「二重言語文学」という概念の中から探ろうとしたのは大体二〇〇〇年前後(四二)からであるが、この観

点は一九四〇年代前半期の日本語文学と暗黒期文学はつまり親日文学であると断定する論理とはその基本的スタンスを異にしている。

例えば、金允植は「日本語で作品を書いた場合を引括めて親日文学と呼ぶのか、新体制に迎合するもののみを指して呼ぶのか」(四三)という問いをおして〈親日文学〉の範囲に疑問を投げ掛け、「二重語創作」に対する解明は「地球化時代として規定される二一世紀に差し掛かった、韓国近代文学研究陣が抱いている一つの課題」(五二頁)であることを明らかにしてから「二重言語文学」をめぐる議論が急増するようになる。さらには、「日帝末日本語作品は媒体の規定のせいで親日文学として自動的に分類されたりしたが、このような発想は二重語文学の客観的評価には障害物ともなる」(四四)と、一九四〇年代日本語文学を親日文学と同値する論理を廃棄させようとする議論が全面化する。それでこの当時の韓国文学を「親日文学」という観点からではなく「二重言語文学」というプリズムをおして定立し直すようになる。

それだけではなく、尹大石は「既存の親日文学論に違和感を感じ当時の〈親日〉知識人たちの「真情性に対する没理解は「親日文学」を「怠惰」や「怠り」、あるいは「利己主義」の所産として責め立てる民族主義の傲慢に過ぎない」(「序文」)と指摘する。また、「だから「親日」と「親日」批判(民族主義、反日)と「近代化」が共謀している」(四五)と指摘しながら韓国の「近代及び国民国家の矛盾をこの時期の文学及び言説の中で発見しそれを韓国という国民国家の起源と見做すことで近代及び国民国家に亀裂を作り出」(二二六頁)そうとする議論もなされていることを明らかにしている(四六)。このような研究は一九四〇年代の文学を考慮する際、

民族主義や国民国家という評価の枠組みを廃棄しようとしており、当時の論理の中から韓国近代社会の起源を見つけ出すことで近代や国民国家そのものに疑問を投げ掛けようとする試みといえる。

以上で見てきたように、韓国の国文学界では二〇〇〇年代以降一九四〇年代の植民地文学研究が「親日文学」研究から「二重言語文学」研究へと移り変わったと言える。日本の場合も植民地日本語文学に対する研究が盛んになされているが、最近一〇、二〇年の間にこの分野の研究がこれほど活発に行われている理由はどこにあるのか。それは今まで文学と言えば自国の代表的文学に正典を自明な実体として系譜化した文学主義から様々な分野を横断しようとする文化研究への移行、それに伴うポストコロニアル批評及び文化研究における文化理論の影響、近代国民国家及び帝国主義に対する批判的再考察、これまでの文学史を国民、国語、国家、国民文化が一体化されたものとして前提する国文学伝統からの脱却、グローバル時代の到来と脱ナショナリズムの主張などの要因による現象と指摘できる（四七）。

五、結論―東アジア植民地文学史構築の可能性

以上で考察したように、二〇〇〇年以降韓国近現代文学界では既存の「親日文学」が「二重言語文学」という観点から再解釈されており最近一〇年間この分野をめぐって旺盛な研究成果を残し今までの研究の空白を埋めている。にもかかわらず、二〇〇〇年代に刊行された〈韓国文学史〉でも「親日（二重言語）文学」は十分な記述の空間を得ておらず、依然として既存の記述内容を踏襲しているこ

とも事実である。この現象には一國文学史を支えているナショナル・アイデンティティの論理、属文主義の問題、「親日文学」を排除することで民族のプライドを守るといった論理など、様々な要因が考えられる。

ところで、韓国文学界で「親日文学」や「二重言語文学」を論じる際その対象となるのは韓国人作家たちであるが、それを朝鮮半島の植民地文学全体へとその視野を広めるともう一方の新しい範疇が存在する。例えば、当時植民地朝鮮に居留しながら朝鮮半島で発表した日本人の植民地日本語文学、植民地朝鮮で経験したことを日本「内地」で発表した日本人作家の作品、日本「内地」で作品を発表した朝鮮人作家の作品などがこれに当たる。

このような文学作品は今まで韓国文学史や日本文学史という一國文学史の論理だけでは説明しきれない分野である。また朝鮮半島と同じく日本の植民地であった台湾の状況、旧満州国の文学や中国の日本占領地文学、いわゆる「南方」地域に当たる東南アジアの状況を考慮に入れれば、この地域をめぐる植民地文学にも同様の論理が当てはまる。

一九九〇年代以降、日本や台湾、韓国、中国などではそれなりの学問的・社会的要因により植民地文学に関する膨大な資料調査とともに盛んな研究成果を残している。しかし、この植民地文学研究は作品の言語的側面や発表された地域、作家の民族だけを考慮して一國文学をベースとして論じられる場合がほとんどである。一九九〇年代以降東アジア地域の植民地文学研究はその間それぞれの国文学史を支えていた民族主義や一國中心主義の克服という観点に負ったところが極めて多いと言わざるを得ない。そのような問題意識があ

ったにもかかわらず、結果的には植民地文学研究が自国の文学領域を拡張する一環として、もしくは自国の主流文学に漏れている部分を補う方法でなされているケースが少なくないといえる。

しかし、作品が発表・刊行された地域性、発表した作家の民族性、発表メディアの言語などが複雑に絡み合っている東アジア地域の植民地文学は特定な民族の一国文学史の中に収めるには限界がある。まさしくここに〈東アジア植民地文学史〉に対するこの地域の共同研究と記述の必要性があると言わざるを得ない。

〈註〉

- (一) この学術シンポジウムに基づいて韓国、中国、台湾、アメリカ等この分野三四人の論文を〈総論〉及び〈朝鮮〉編から成る第一巻と〈台湾〉編、〈満州・中国〉編、〈環太平洋〉編から成る第二巻を同じ題名の単行本(ソウル、図書出版ムン、二〇一一年、一月)を刊行した。
 - (二) 尹大石『植民地国民文学論』亦樂、二〇〇六年、一二六頁。
 - (三) 今まで韓国で親日(二重言語)文学に関する研究成果のまとめは鄭炳浩「韓半島植民地(日本語文学)の研究と課題」(『日本学報』八五、韓国日本学会、二〇一〇年一月)、盧相來「日帝下二重語文学の研究成果と期待効果」(『語文学』第一〇二輯、韓国語文学会、二〇〇八年二月)、金順楨他『朝鮮人日本語小説研究』(J&C、二〇一〇年)、趙鎮基『日帝末期国策と体制順応の文学』(ソミョン出版、二〇一〇年)などがある。
- この中で拙稿の場合は、韓国人作家の作品だけではなく韓半島で刊行された日本人の文学作品も視野に入れるべきであり、現在一国を単位として研究されている植民地文学研究の現状を打開するために国際的共同研

究を提言している。

- (四) 高野辰之『国文学史教科書』上原書店、一九〇二年、一頁。
- (五) 芳賀矢一『国文学史十講』富山房、一九九九年、七―八頁。このような認識は最初の日本文学史である三上参次・高津敏三郎共著の『日本文学史』(一九九〇)を初めて当時ほとんどの日本文学史に見られる論理である。
- (六) 鈴木貞美『日本の「文学」概念』作品社、一九九八年、二二二頁。
- (七) 小森陽一『ゆらぎ』の日本文学』NHKブックス、一九九八年、一六頁。
- (八) 平岡敏夫『明治大正文学史集成・解説』『明治大正文学史集成3 明治文学史』日本図書センター、一九八二年、二頁、を参考。
- (九) 中国で文学史が編纂される以前から古城貞吉『支那文学史』(経済雑誌社、一八九七)、笹川種郎『支那文学史』(博文館、一八九八)、中根淑『支那文学史要』(金港堂、一九〇〇)など、日本でも相次いで中国文学史が刊行される。
- (一〇) この他、文学ジャンル史と言える金台俊の『朝鮮漢文学史』(一九三二)／『朝鮮小説史』(一九三三)、趙潤濟『朝鮮詩歌史綱』(一九三七)、金在喆『朝鮮演劇史』(一九三九)などがある。
- (一一) 趙東一『韓国文学と世界文学』知識産業社、一九九一年、二三〇頁。
- (一二) 李光洙「復活の曙光」権寧珉編『韓国現代文学批評史(資料一)』檀国大出版部、一九八一年(初出、一九一八年)、一〇一頁。
- (一三) 安廓「朝鮮の文学」権寧珉編『韓国現代文学批評史(資料一)』檀国大出版部、一九八一年、三一頁。
- (一四) 鄭炳浩「韓国の(朝鮮文学(史)論)形成と中国思想の表象―(日本文学史)及び(朝鮮(人)論)の比較をとおして」『日本学報』第八一輯、韓国日本学会、二〇〇九年一月、参考。李光洙の朝鮮文学不在論

は当時日本知識人たちが主張する日本文化移植論と日鮮同祖論の基本的論調であり、安廓の場合は朝鮮の「悪弊」というイメージは近代以降日本が創り出した否定的な朝鮮(人)像の典型的な言説とほぼ一致している。

(一五) 金思燁『改稿 国文学史』正音社、一九四八年、五四頁。

(一六) 趙潤濟『国文学史』東国文化社、一九四九年、一―四頁。

(一七) 「韓国文学は(中略)開化啓蒙時代から日本植民地時代へと繋がる政治的激変の中で文化的アイデンティティのもっとも重要な徴表として位置していた」(一三頁)とか、「韓国の近代文学は国語と国文という単一な言語文字の基盤の上から成り立つ」(一六頁)という記述がこれに当る。(權寧珉『韓国現代文学史』民音社、二〇〇二年)

(一八) 林和『文学の理論』学藝社、八二七頁。

(一九) 張徳順『韓国文学史』同和文化社、一九八二年、一五―一六頁。

(二〇) この移植論からもう一步進んだ趙演鉉はヨーロッパとは異なり

「韓国近代史の微妙な不自然性」(二二頁)と「後進性とその畸型性」(二三頁)によって「韓国の近代文学及び現代文学」が「そのあらゆる稚気と未熟と混頓と不完全―そしてその畸型的な発展」(三二頁)を成している」と、韓国文学の近代性そのものに疑問を投げ掛けている。

(二二) 金允植・金炫『韓国文学史』民音社、一九七三年、一六頁。

(二三) 洪文杓『韓国現代文学史一』創造文学史、二〇〇三年、六〇頁。

(二四) 趙演鉉『韓国現代文学史』現代文学社、一九五六年、四五九頁。

(二五) 金在湧『韓国近代民族文学史』ハンギル社、一九九三年、五八頁。

この金在湧の文学史に対して洪文杓は「進歩的左派的観点から文学史を記述」(六〇頁)していると述べている。

(二五) 韓国文学史の展開過程に関しては金允植・金炫の『韓国文学史』、

金在湧の『韓国近代民族文学史』でもその紹介があるが、詳しいものとしては梁文奎「韓国近代文学史論の認識と争点」、『二〇世紀韓国文学の反省と争点』文学と思想研究会、ソミョン出版、一九九九年、がある。

(二六) 金思燁前掲書、五三八頁。白鐵の場合もこの時期を「朝鮮新文学史上において羞恥に満ちた暗黒期」(白鐵『朝鮮新文学思潮史』首善社、一九四九年、三九九頁)と規定している。

(二七) 金善鶴『韓国現代文学史』東国大学校出版部、二〇〇一年、一五一頁。

(二八) 金思燁前掲書、五三七頁。

(二九) 李秉岐・白鐵『国文学全史』新丘文化社、一九五七年、四五〇頁。

(三〇) 同右、四五〇頁。

(三一) 趙潤濟『韓国文学史』探求堂、一九六三年、五九五頁。趙潤濟は

続いて「一九四〇年以後の国文学史には暗黒が訪れたというより文字どおり切望が訪れたのである」という認識を見せている。

(三二) 張徳順前掲書、四四七頁。その上、この当時の文学状況に対して「政

治的には植民地であったがそれでも文学だけは韓国的な伝統を継承して来る途中でさらに「国民文学」の先唱で文学さえ日本の植民文学となり韓国文学は実に日本文学の一分野、一地方文学へと転落してしまつたのである」(四五八頁)という認識を記している。

(三三) 權寧珉前掲書、四四五頁。

(三四) 金允植・金炫前掲書、二八三頁。

(三五) 金在湧前掲書、一九九三年、六四五頁。

(三六) シンヒギョ「親日文学規定考察―親日小説と関連して」『韓国言語文学』第四五輯、韓国言語文学会、二〇〇〇年、四二二頁。

(三七) 林鍾国『親日文学論』民族問題研究所、二〇〇二年、一九頁。初版

本は一九六六年。

(三八) 宋敏鎬『日帝末暗黒期文学研究』セムン社、一九八九年、四、六一七頁。

(三九) 金在湧前掲書、七八一頁。

(四〇) 洪文杓前掲書、四五八―四六〇頁。ここで洪文杓は今まで「親日文学」がきちんと記述されずに「隠蔽されたり禁忌視されたりし」たと指摘し「一九四〇年代暗黒文学は否応なしに私たちの責任であり我が文学史の傷を照らす鏡である」という点と、たとえ否定的ではあるが植民地文学意識の一断面であるという点から取り扱われるべきである。そして歴史的事実はいかなる名分によっても決して隠蔽されることはできないという点から我が文学史の痛い教訓として取り扱われるべきである」と記述している。

(四一) たとえ(親日文学)という枠組みの中で議論があった場合でも、金在湧『協力と抵抗―日帝末社会と文学』(ソミョン出版、二〇〇四年)や柳潜善「親日文学の歴史哲学的脈絡」(『韓国近代文学研究』第七号、韓国近代文学会、二〇〇三年四月)などで示されているように、その概念領域の再設定問題をめぐって様々な形態の議論があった。特に柳潜善はこの論文で林鍾国と金在湧の(親日文学)に対する概念を言及しながら前者の「親日文学に対する規定はあまりにも廣すぎ」(一三頁)ており、後者の「親日文学の範囲は過度に狭い」(一四頁)と指摘している。

(四二) 鄭百秀は『韓国近代の植民地体験と二重言語文学』(亜細亜文化社、二〇〇〇年)で植民地時代朝鮮半島の言語的状况を「支配者の言語である日本語と植民地の独自のな言語である韓国語が互いに対立・共存する(二言語状況)であった」(一六頁)という認識から、このような「二言語状況」、「二重言語作家」という問題が韓国文学界で「本格的に取り扱われたことがなかった」(四五頁)ことを初めて問題視している。

(四三) 金允植『日帝末期韓国作家の日本語物書き論』ソウル大学校出版部、二〇〇三年、四七頁。

(四四) 盧相来「日帝下二重語文学の研究成果と期待効果」『語文学』第一

〇二輯、韓国語文学会、二〇〇八年一月、三五二頁。

(四五) 尹大石前掲書、二〇〇六年、一六頁。

(四六) 金哲他『文学の中のファシズム』(サムイン出版、二〇〇一年)や權明娥『歴史的ファシズム 帝国のファンタジーとジェンダー政治』(冊世上、二〇〇五)など参考。

(四七) この詳細な内容は鄭炳浩「韓半島植民地(日本語文学)の研究と課題」を参考。

(韓国・高麗大学校日語日文学科副教授)